動機に関する会話：パート1

**（場面は、XXXXライオンズクラブが例会に利用している地元のレストランです。例会はまだ始まらず、会員は歩き回って雑談を交わしています。）**

チャールズ：やあマリア、会えてうれしいよ。君が何回か例会を休んでいたので、みんな寂しがっていたんだよ。

マリア：私も会えてうれしいわ。最近は例会が長すぎて、学校の前の晩に遅くまでいてくれるベビー・シッターを見つけにくくなっているの。でも、今夜は来年度の委員会への参加を決める機会だって言うから、参加することにしたのよ。

チャールズ：そうだね。本当に興味を持てる仕事を見つけたいなら、僕らにとって大切な例会だ。リストと委員長には、僕もとても興味があるんだ。

ベン：君たち、委員会への参加について話していたかい？　僕は今夜だって知らなかった…来てよかったよ。

マリア：あら今晩は、ベン。そうなのよ、去年のカレンダーを見たらこの時期だったので、クラブ幹事に電話してみたの。彼女も今週だって言っていたわ。その場で登録できるよう、この例会には絶対に出席したかったのよ。ほとんどの委員長が「仲良し」から指名するので、リストに名前を入れる機会を逃してはならないわ。

ベン：そうか。僕はクラブに入って初めての年なんだ。通知や手紙がもらえるものとばかり思っていたよ。

チャールズ：僕はクラブに入ってほとんど20年になるけど、以前はこの種の情報をクラブ会報で発表していたんだ。発行が年4回に減ってしまって、会員の目に触れなくなってしまったんだね。

マリア：まあ。そんなに古くからの会員だったなんて、知らなかったわ。それじゃあ、クラブの結成当初からってことかしら。

チャールズ：実際には、クラブが結成されてから2年後だけどね。失明者を支援するライオンズの活躍を耳にして、自分も参加したいと考えたんだ。活動はとても楽しかったし、新しい友人を作る機会にも恵まれた。だから会員を続けてきたんだよ。

ベン：それはすばらしいね、チャールズ。僕が入会したのは、他者に奉仕していると自分に誇りを持てるからなんだ。でも正直なところ、このクラブではまだそれを感じたことがないな。どちらかと言えば…委員会に参加して、言われたままに動き、何の意見も差し挟まず、そのうちにすべてが終わってしまう。評価されることもほとんどないし、自分のやっていることが役に立つとも思えない。今年は何かが変わるといいんだけど。

マリア：ベン、そんな思いをしていたなんて、本当に残念だわ。あなたの失望も、少しは理解できるつもりよ。私の場合、最初の1～2年は本当に充実していたの。新しい友人と出会い、確かに地域社会を支援し、自分の努力が認められていると感じられた。会員生活と家庭生活を両立することもできたわ。残念ながら、私たちはここ数年低迷しているようね。計画や活動に関しては衝突が絶えないし…子供たちから離れていられる時間が過ぎても、延々と例会が終わらない。それでも何かを改善できればと思うけど、自分が時間を無駄にしていると感じることもあるのよ。

チャールズ：君の言う衝突と「混乱」は一時的なもので、クラブ役員が変わったときにはよくあることだよ。僕も同感だけど、気にしないつもりだ…いいこともあれば、悪いこともあるさ。

ベン：僕もしばらく君の意見に従ってみるよ、チャールズ。人に尽くすことのすばらしさを心から信じているし、クラブの仲間も大好きだけど、僕は会員に向いていないのかもしれないね。

# 動機に関する会話：パート2

**（委員会の登録用紙が配布され、会員はどこに参加できるかを確認しています。）**

チャールズ：ベン、君はどの委員会を選ぶつもりだい？

ベン：そうだな。僕は広報がやりたいんだけど、委員長がジョージなんだ。彼はちょっと高圧的だって聞いたんだけど。

マリア：*ちょっと* ですって?! 　2年前に彼と組んだときには、最初の6週間に*毎週*会議が開かれたものよ。それが行事の2週間前になると、毎晩私を呼びつけて作業の進み具合を確認しようとするじゃないの！　彼が委員の監督にどれほど熱意を燃やしているか、みんな本気で不平をもらしていたわ。

チャールズ：誰かも同じことを言っていたよ。クラブの仲間と協力する喜びを自分が台無しにしているって、ジョージは気づいていないのかな？

マリア：一部の委員が会議の席で、彼に反論したことがあったのよ。

ベン：彼の反応はどうだった？

マリア：「仕事は仕事さ。誰かがやらねばならない」ですって。それからというもの、彼が近くにいないときには、お互いにこの言葉を真似して笑ってやることにしているの。

チャールズ：それは楽しそうだね。

マリア：ええ、その通り。彼のいわゆる名言は他にもあって、例えば「広報は極めて重要なので、適切に行わなければならない」って言うのよ。でも、ジョージを満足させられるような成果を収めた委員はひとりもいなくて、それが唯一の問題だったわけ。

ベン：ジョージは委員会の仕事を楽しんでいたのかな？

マリア：そうは言えないようね。彼がなぜ広報を続けているのか、不思議に思うわ。

チャールズ：サムも委員長になったようだよ。

ベン：そうだね、聴覚保護委員会だ。これはうまくいくんじゃないかな！

チャールズ：僕がサムと組んだときには、日常的な作業に至るまで、彼の手並みは見事なものだった。彼は大いに自由を認めて、やりたいようにやらせてくれるんだ。会員の多くはすでに動機を持っていて、基本的な指示だけが必要だと考えていたからね。彼は必ずしも創造的ではなかったけれど、僕らに創造性を発揮させてくれた。これだけは確かなことだが、よほどの危機が訪れない限り、毎晩委員を呼びつけたりはしないだろう。

マリア：サムは多分、それほど「報酬」にこだわったりもしないはずよ。私たちが仕事を終えたとき、ジョージが大金を盾に費やしたことを思い出すわ。まるでつまらない飾り物が、私たちの悲しみのすべてを埋め合わせるとでも言うようにね。

ベン：そうだね。聴覚保護委員会の仕事は大変そうだけど、君たちの意見は正しいと思うよ。サムは僕らに仕事を任せてくれるだろう。君たちがどうするかは分からないけど、僕は今すぐ登録するよ。